



小谷卓也さんを偲んで

SCE・Net 安全研究会 牛山 啓

E-136

発行日

2020.11.18

小谷さんに初めてお会いしたのは、12年ほど前 SCE・Net に入会し安全研究会に参加するようになった時である。会では厳しいご意見も出されており、第一印象はとっつきにくい方かなというものであったが、会後の懇親会でアルコールが入ると目を細めて優しいお顔になり、印象ががらりと変わってしまった。経緯は定かには覚えていないが、当時研究会で進めていた安全警句について、なかなか進捗していなかったのが気がかりだったようで、小生の意見を聞きたいとメールでどっさりと警句の原稿を送ってこられた。小生の気の付いた点を記載して送り返したのだが、それがきっかけであったろう、気さくにお話ができるようになったのは嬉しかった。

偶々、研究会からの帰りは荻窪まで地下鉄電車で一緒するようになり、その間小谷さんがおしゃべり好きだったようで小生はもっぱら聞き役に回った。会社生活でのご苦労話、長い間の米国駐在でのエピソードやドイツベルリンの壁の崩壊前後の様子など、大変面白いお話を聞かせていただいた。当時安全研究会では、小谷さんがただ一人の米国 AICHe（化学工学会）会員であったが、米国駐在当時から会員を継続しておられ、すでに名誉会員となっておられた。米国の会社を訪問すると、AICHe 会員証を額に入れて机上に飾ってあるのがよく見られ、会員になるのはなかなか難しいこともあって、AICHe 会員であることは一つのステータスになっていた。

2006年頃、この AICHe より小谷さんに、毎月発行している Beacon（プロセス安全に係る記事）の翻訳をする人を紹介して欲しいとの話が来たそうである。早速化学工学会の安全部会に紹介したところ、当時は独自路線をとって AICHe と関わりがなかったためか、にべもなく断られたとのことである。そこで SCE・Net の安全研究会で対応することとなったそうであるが、皮肉にもこれが現在の安全研究会の大きな柱となり、それをベースに図書「事例に学ぶプロセス安全」も丸善から出版することができた。小谷さんは訳についても非常に厳密な訳を心がけておられ、各担当者の訳を必ず事前にチェックされておられた。また、冒頭に述べた安全警句も中断はあったものの幾多の加除訂正を経て、現在は SCE・Net ホームページに掲載されている。

この Beacon 翻訳取り組みを契機に、それまで多少目標が定まらなかった安全研究会の活動が急速に活発になり、現在もそれが維持されている。小谷さんは現在の安全研究会隆盛の基盤を築き、軌道に乗せてくださった立役者であるといっても過言ではないと思う。

Beacon で思い出深いのは、初めて定量的な安全評価を取り上げたメトリックスの翻訳である。Beacon2008 年 7 月号および 8 月号はプロセス安全関係の記事であったが、翻訳担当となった山崎、長安、澁谷の 3 氏および小生は一応 Beacon 訳を試みたものの内容的にはちんぷんかんぷんで、これは基となったメトリックスを訳さないと分からないのではないかということになり、AIChE の了解を得てその訳を分担して試みたが、難解な英語にお手上げ状態であった。まとめにあたって小谷さんに総括していただき、単なる語句修正にとどまらず、AIChE とのやり取りから、訳語の統一・注釈までご苦労いただき、全体をまとめて下さった。最終の仕上げまでにメールのやり取りだけではならず、荻窪の喫茶店で何度も打ち合わせしたことが懐かしく思い出される。この小谷さんのご努力により無事 SCE・Net のホームページに訳文を掲載し、プロセス安全メトリックスの概念を初めて日本国内に紹介することができた。これに石油化学工業協会の方が興味を持たれたため、先方に伺って小谷さんに講演をしていただいた他、化学工学会年会で小生も一緒に発表させていただいた。

小谷さんは今年 91 歳のご高齢にもかかわらず相変わらずお元気であったようで、長年手がけられておられた日本語・英語・スペイン語による技術用語辞典（改訂版）を今年ようやく出稿にこぎつけられたそうで、来年 6 月には出版される予定とのことである。数年前から透析で週 3 回通院されておられたが、3 か月ほど前から医者のお勧めもあって入院されておられた。11 月初めにかかった誤嚥性肺炎がもとでお亡くなりになられたとのこと、完成本を手にとることができなかったのはさぞお心残りなことだったろうとお察し申し上げます。入院されていたのを知らず、お見舞いにも伺えなかったのが悔やまれるが、最後の安らかなご尊顔を拝することができたのは光栄であった。

思えば昨年 12 月、小谷さんが久しぶりに安全研究会にお見えになり、渋谷、中村両氏と小生の 4 人で茗荷谷で忘年会をしたのが、生前の氏にお会いできた最後となってしまった。その時はまだお酒も飲まれ、お元気であったのが眼に焼き付いて忘れられない。もうお会いできないかと思うと本当に残念である。心からご冥福をお祈りし、鎮魂歌を捧げる。

“Requiem Aeternam Dona Eis, Domine.”